

---

# 薄桜鬼

沖川 美桜

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薄桜鬼

### 【Nコード】

N2333BA

### 【作者名】

沖川 美桜

### 【あらすじ】

ある冬の日の巡察の話。

一番組の巡察に同行していた千鶴はお千ちゃんと会い、そのまま沖田さん、平助君を交えてお茶会が始まる。

（この話は勢いだけで書かれたものです。

初投稿なので誤字・脱字・文法間違いが予想されます。

ちなみに登場するのは

- ・千鶴ちゃん
- ・お千ちゃん
- ・沖田さん（やや少なめ）
- ・平助君（結構少なめ）
- ・斎藤さん（ほんの少しだけ）
- ・薫（喋らない＋斎藤さんより少ないかも）

原田さんは空気化しています  
それでもいい方のみどうぞっ！！

**（前書き）**

この話は、勢いだけで書きました。

なので何が言いたいとかそんなのありません！！

それでもok？

これは、ある日の巡察のこと。

「……今日も、父様のことは分かんなかったな」

私、雪村千鶴<sup>ゆきむらちづる</sup>は消息不明の父を捜し京まで来た。

その時、新選組の秘密を知ってしまっ<sup>て</sup>て以来屯所で毎日を送っている。

最初は、不安だらけだったけど今では巡察に同行を許してもらえたり京に知り合いもできた。

「あゝ千鶴ちゃん!!」

呼ばれた方に目を向けると鮮やかな黄色の和服を着た、

「お千ちゃん!!久しぶりだね」

京でできた女の子友達、お千ちゃん。

二人で会話に花咲かせていると、沖田さんが気がついて声を掛けてきた。

「千鶴ちゃん達。」

「あつ、すいません!!巡察の途中で話し込んで!!」

お千ちゃんに謝ろうとすると、

「巡察はもう終わり。隊士には先に帰ってもらった。

せつかくだから、ゆつくりお茶でも飲んだら?」

「でつ、でも土方さんが怒りませんか?」

そついうと、何故か沖田さんはほほ笑んで

「大丈夫。大丈夫。僕も近くににいるから。それに、ほら」

沖田さんが顔を向けた方向を見ると、浅葱色の羽織を着た

「平助君!平助君も巡察?」

いつのまにか八番組組長の平助君がいた。

「巡察はもう終わったけど、千鶴たち見つけたから隊士たちには先帰ってもらった。」

「平助もきたし、いいんじゃない？」

平助君は、訳が分かってなさそうだけどお千ちゃんか

「美味しい、お饅頭のお店を見つけたの。」

お土産にもできるから行きましょ？」

その言葉に後押しされて、お茶会が始まった。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

「そういえば、昨日二番組の永倉さん見たわ。」

「そうなんだ。どんな様子だった？」

「新八さんのことだから、どうせ騒いでたんじゃない」

「あー、たしかにそれ以外考えられねー」

「寒くないのかと思った。」

[illegible]

(たしかに)

新選組の3人は、同じことを考えた。

しかし、

•

「どうしたの？急に黙り込んで。」

「……………それ言ったら俺はどうなるのかと思って。」

[illegible]

確かに、平助君も薄着。

雪のちらつく季節になろうとも、どんなに暑い夏であろうとも衣替えしたところを見ることがない。

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

——沈默——

「あつ、千鶴ちゃん！お土産買わなくていいの？」

「そうだった。買ってくるね!!」

そう言って、お店の中に入るといろんなお菓子が並べてある。

「どねにしよう」

ふと目にとまった兎の形をしたお菓子。

(・・・この前、斎藤さんと雪うさぎを作ったつけ。)  
「これ下さい」

「お千ちゃん!!買えたよ!お土産のお菓子。」

外に出ると、お千ちゃんは空を見上げてた。

「・・・お千ちゃん?」

声をかけるとハツとしたように振り向いた。

「どうしたの?」

お千ちゃんは、少し考えてから

「幼いころ、千鶴ちゃんに似た友達がいたの。」

その子の家に行った時に二人で見た空に、似てるなって思ったの。」

そう言われて、空を見上げた。

新選組の羽織のような青さの空。

そこにポツンと浮かんだ雲。

「・・・どこか懐かしいような気がした。」

「私も、この空を見てたのかもしれないね。」

お千ちゃんは、ちよつとの間目を見開いて

「そうだったら、素敵よね。」

そう笑ってた。

私もつられて二人で笑いあった。

「お千ちゃん、今日はありがとうね。」

楽しかったよ。」

「私もよ。千鶴ちゃん。」

また、美味しいお菓子のお店探しておくわ」

・千姫・

「千鶴ちゃんはある頃のこと、少しだけでも覚えているのかしら・・・？」

「そうだったら、嬉しいけどなあ。」

幼いころに千鶴と薫と遊んだこと。

「覚えてなくても、また千鶴ちゃんとは遊べたけど・・・。」

もう一人。

彼女の兄は、今何をしてるのか分からない。

「また、あんなふうになれたらな。」

街の中の雑踏にいる少女。

ふと、空を見上げた。

その眼に映るのは・・・

- - - - - E N D - - - - -



（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

最初は、千鶴ちゃんとお千ちゃんの会話だけで終わらすつもりが、何故か薫で終わりました（汗

ちなみに、永倉さんの服の会話は実際に友達と話したことです。  
あの三人組の服は寒そうですね・・・

ちなみに、私の脳内では幼いころは千鶴と薫は超がつくほど仲が良く、お千ちゃんもよく遊びに来ていたという設定です。

どうでしたか？

感想、など待ってます！！

ぜひ送ってください！！

読んでくださって本当に、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2333ba/>

---

薄桜鬼

2012年1月5日22時46分発行